

わたしーの京都

河野裕子

曲水の宴の人々―上賀茂神社

富小路禎子さんが亡くなられた。新年早々に新聞の訃報欄で知ったが実感がなかった。遠くに住んでいる人の死は、やはり遠いものにしか感じられないものである。

富小路さんについては、上賀茂神社主催の曲水の宴のことが鮮明な印象として残っている。それは平成六年三月の第一回目の曲水の宴でのことであり、二回目からは奉仕されなかったことを考えると、その頃から体調がよくなかったのだろう。

曲水の宴の前日には習礼がある。簡単にいえば予行練習のこと。その後、懇親会になり食事が出る。そのとき富小路さんとよく喋った記憶があるのは、席が隣だったのかもしれない。

ない。富小路さんは実にあっけらかんとした方だった。謡で鍛えた大きな声でよく話され、よく笑われた。こんなにカラカラと笑う女の人は珍しいと思った。人との応対もさっぱりとしていて、わたしはとても好感を持っていた。

富小路家は京都に千年続いた貴族の家柄である。富小路さんは東京生まれの東京育ちだが、京都にはそれなりの思い入れも矜恃もあるはずなのに、そういう感じはまるでなかった。

翌日の本番のときは、女性は小桂に緋の袴、髪は束髪、手に扇という形になる。この支度に二時間ばかりかかるのだが、顔に水白粉を

刷毛で塗られるのには閉口する。冷たいうえに顔じゅうがパリパリになり、平べったい凹凸のない真っ白い顔ができあがる。

何百年も前の富小路さんの祖先の女性たちは、みんなこんな格好をしていたのだと、衣装を着せてもらいながら、ふと思ったことを覚えてる。当の富小路さんは大きな声で笑ったり、「まあ」とか「あら」とか言って、まるで京都のお姫さまらしくない。記憶に違いがなければ、薄紫地に亀甲紋の衣装を着ておられた。それは葵祭りでも使う衣装で、すこし地味だったが富小路さんによく似合っていた。富小路さんが亡くなってしまわれて、本当に富小路家の血筋は絶えてしまった。京

都には富小路通りが今も残っており、この通りも千年の間にいろいろと変遷があったようである。

亡くなられた方といえば、和田周三さんも三年前に亡くなっておられる。同じ京都に住んでいても、曲水の宴という縁がなければ、お会いすることもあまり無かっただろう。

俗気のない淡々としたところがあり、懇親会するとき、「何やこの頃はテレビで京都の殺人ものが流行るけど、渉溪園（曲水の宴の催される庭）にも撮影に来たら困ったこつちや。血の代わりにトマトジュースでも使おうかな」とのんびりした口調で言われた。宮司さんたちが、「うちでは絶対ことわりません」と言われ、そうした何でもないやりとりが、あれから何年もたつのに妙に忘れられない。神社の中を行列を作って歩くのは毎年のこ

とだが、和田さんのすぐ後ろを歩いたことが一度ある。対面するのでも横に並ぶのでもなく、人の後ろに位置すると、遠近感に狂いが生じて一瞬何かを感じることもある。この人はこの世の外を歩いているようなところがあるな、と思ったのは、あれは何だったのだろう。

曲水の宴は今年で九回目を迎えるが、一回目からずっと奉仕しているのはわたしと中野照子さんで、岡野弘彦さんは一度だけ欠席されたがあとは皆勤で、三回目から永田和宏が加わっている。衣冠装束が実にしつとりと身に合い、物腰動作が落ち着いているのは岡野さんである。代々神主の家に生まれ育った方なので、生まれつき神職としての資質が備わっているのだろう。背広に着替えたときの岡野さんは、この世を忍ぶ仮の姿のように見えってくる。曲水の宴が始まり、岡野さんが円座

につかされると、要が位置を得たようにゆつたりと座が落ち着く。

披露は冷泉家時雨亭文庫の方々。読師は冷泉貴美子さんが務められる。冷泉家は御子左家から出て先祖には藤原俊成や定家がいるという歌道の家である。冷泉貴美子さんは京都女子大の先輩ということもあり、初めから親しみを持っていたが、飾り気のない器の大きな人だと会う度に思う。

歌人で奉仕される人のなかには冷泉為弘さんがおられる。蹴鞠保存会の会員だそうだが、残念ながら蹴鞠をされるのを見たことはない。向陽会にも属しておられて、この会は月一回、旧派和歌の歌会を油小路の霞会館でしているという。どんなメンバーの方がいらっしゃるのですかと尋ねたところ、門跡尼寺や中宮寺などからの参加があるという。大体いつも二十人くらい。面白いことに、霞会館というのは東京にもあって、東京が本部である。霞が関ビルの三十四階にある。超近代ビルの一室で旧派和歌の歌会がもたれているというのは不思議な情景であるが、それが伝統というものなのであろう。因みに、向陽会は明治天皇が作られた歌会で、百二十五年間続いているという。

（かわの・ゆうこ「塔」選者）